

---

# 罪の王冠と破滅の黙示録

プーモ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

罪の王冠と破滅の黙示録

### 【Nコード】

N1647Z

### 【作者名】

プーモ

### 【あらすじ】

ギルティクラウンの二次創作です。オリ主モノ。

西暦2039年、10年前に起きた『ロストクリスマス事件』で、ある体質を負ってしまった主人公が、原作をブレイクしない程度に暴れまわる！

……予定。

## 破壊者の生誕（前書き）

作者はギルティクラウン（以下ギルクラ）に嵌まってしまったため、完全見切り発車&不定期更新になります。受験生ですし。ストックも無いけど頑張るぜい！

## 破壊者の生誕

「感染レベル、ステージ4を確認。第四隔離施設に移動させるぞ……と、言っても聞こえていないか」

聞こえている。お前の声は、僕に届いている。

だから 止めてくれ。

僕を閉じ込めるのは、僕を死人みたいに扱うのは、止めてくれ。

「やれやれ……あの施設なら、新たなワクチンとかも手に入るかも知れんからな……お前にとってもためになるだろ。」

「たく、ワクチン接種を拒むからこうなんだよ」

止める……！

僕は、GHQヤツらの言いなりになんかならない！

僕は、僕は

「力が、欲しい？」

力？ 何のために？

「自由を勝ち取る力」

そんな力が……手に入るのか？

「君が、望むなら」

……欲しい、力が。

僕が僕であるために、僕が自由を掴むために！

「な、何だ、この反応は……ぐうつ！？」

気がつけば、僕の身体は動いていた。

身体を囲っていた大仰な機材を吹き飛ばす。

何かに火花が引火したのか、辺り一面が紅蓮の炎に包まれた。

今にも僕に飛び火しそうなそれは、一閃の下に払われた。

僕の身体の半分を覆っていた結晶は、剣の如き形を保ち、僕の意のままに操れる。

「貴様、何故！？」

僕の担当の男が、酷く取り乱している。今の今まで死人同然だっ

た僕に、今は恐怖の目を向けている……滑稽だな。

僕はその男をただ一瞥し、その場を去った。

24区第6病棟　そこで、僕は力を手に入れた。

自由を勝ち取る、破壊者の力を。

「仁、起きて」

「ん……いのり？」

重い目蓋を開くと、そこでは端正な顔立ちの少女がこちらを覗き込んでいた。ちなみに、服装は赤くてヒラヒラした服。仲間内では『金魚服』と呼ばれている、何か可哀想な服だ。

それを着こなすこの娘は楪　いのり。恐らくこの娘以外にこの服は似合わないだろう、桃色の髪をした可憐な少女だ。

彼女は僕の仲間なんだが……はて、何故僕の部屋に？

「今日は作戦会議がある、って涯が言ってた」

しまった……そういえばそんなことを言ってたな、涯。

涯とは、僕の所属する組織のリーダー、恙神 涯つがみのことだ。特徴を挙げるなら、金髪のロン毛でカリスマ性に満ち溢れたイケメン……と、これは表向きの涯。

裏ではまあ、可愛いヤツだ。これが。

「悪いな、いのり。僕もすぐ支度するから、先に」

「だめ。着替えも後」

……ああ、また遅刻したのか、僕。

目覚まし時計をちらりと見遣ると　集合時間を、実に30分過ぎていた。

こりゃ、綾瀬に投げられそうだ……いや、アルゴに殴られるかもなあ。

仕方無く、僕は外に出ようとドアのノブに手を掛けた、が。その手首に、手錠が掛けられた。

「……あのー、いのりさん？」

「何？」

あくまでお惚けになられるか。

「この、手錠(?)は何？」

「仁はすぐサボるから、見張り用に」

そういえば、前回会議忘れてどっか行ったら凄い怒られたなあ。

あ、前々回もだっけ。

その所為でいのりが僕の世話係にさせられたんだから、可哀想な話だ。

「早く行こう」

痛たたた。手首の肉が手錠に挟まってるっ！

そんなことはお構い無しに、いのりはガンガン寂れた廊下を進むと、廊下の先から強面な男が曲がってきた。

こいつも僕らの仲間、アルゴだ。白兵戦技術に長ける、云わば切り込み隊長ってヤツ。

「お、仁。どうやら、本格的にいのりが世話係になったらしいなー」

「うるさい、アルゴ(ねくら)。お前も今日は遅刻か？」

「ばかお前、今日の開始時刻遅延するって言ってただろ？ てか、ネクラじゃねえよ」

あ、そういえば、涯がそんなこと言ってたっけ。

て、あれ？ なら、なんでいのりは僕を……？

訝しげな視線を彼女に向けると、パイとそっぽを向いてしまった。僅かに頬が赤くなってるのは、時間間違えたからか……いのりにしては珍しい。

「とにかく、後30分は時間あるんだよ。飯でも食ってきたらどうだ？」

「んじゃ、そーすっかな。さんきゅ、ネクラ」

「だからネクラじゃねえって言ってんだろ！」

ネクラを華麗に無視<sup>スルー</sup>して、僕はくるっとUターン。まずは僕の部屋で着替えてこようとして

「食堂はこっち」

いのりに、逆方向に引つ張られた。手首が折れそうなんすけど、マジで。

そついや手錠これしてたな……忘れてた。

「あの一、いのりさん？」

「何？」

「いやその一、食事の時くらい手錠、外して貰えませんか？」

「ダメ」

「……俺にサンドイッチにしろと、そういうことが、いのり」

「嫌なの？」

「いや別に」

「そう。なら良い」

……未だかつて、ここまで冷たくあしらわれたことがあつただろうか。答えは否、あるいはノー。

いのりはあまり感情を表に出さない娘だからなく、ま、仕方無いか。

「朝からどうしたのですか、仁、いのり」

僕が片手のみでサンドイッチを食していると、前の席に銀髪の男が座った。

四分儀。眼鏡を掛ける知的な男で、いつも丁寧口調。組織の中でも比較的年長に位置する人物だ。こいつも僕らの仲間……というか、ここにいるヤツは大抵仲間だな。

辺りを見回すと、皆は赤いラインの入った黒いジャケットを着ていた。これが僕の所属する組織の基本的な装備、まあ制服みたいなモノだ。

「どうした、って、飯だけど？」

「仁、貴方は女性に繋がれながら食事を取るのが趣味でしたか？」  
め、面倒くせっ！

僕は四分儀の相手があまり得意ではない。だって頭良さそうなん

だもの。

「いのりは僕の世話係だからね」

「誇れることではありませんよ、仁……」

確かに。僕が自分で身の回りのことを出来てないことが露呈しているようなもんだ。

彼女はあまり気にしていないようだが……これでは、僕が何も出来ないヤツみたいだ。

「いのり、これ外して？」

「ダメ」

即決かい。

……まあ、涯の命令なら仕方無いが。いのりは基本、涯の命令には逆らわないし。

そんなこんなで朝食 トーストと目玉焼きというテンプレなメ

ニューだ を戴いた僕は、いのりが食べ終えるのを待ち、それが

フリーファイニング・ルーム  
ら作戦会議室へ向かった。

葬儀社（前書き）

微妙にちやうけど、連投です、はい。

## 葬儀社

『葬儀社』の六本木フォートアジトの作戦会議室は、筒状の縦長の部屋の最下層中央にモニターがあり、作戦実行員は各所からそれを見下ろす形を取っていた。

涯曰く、これは葬儀社のリーダーはあくまでレジスタンスのリーダーであり、権威を振るうためではないことを示す。

ちなみに六本木フォートとは、ロスト・クリスマス事件 10年前の12月に起こった、あるウイルスの感染爆発 パンデミック の現場となつた場所だ。

そう、僕が『破壊者の力』を手に入れる切っ掛けとなつた、忌まわしき場所……それがここなのだ。

閑話休題。

作戦会議室に集まつた面子を軽く見回し、一つ頷いた涯は、高らかに宣言した。

「これより我々『葬儀社』は、GHQへの反撃を開始する」

その発言に、周囲がざわめく。今まではあくまで水面下で行動してきた葬儀社が、遂に動き出すのだ。戦く者も、喜ぶ者もいるだろう。

そう、僕ら葬儀社は、GHQの支配から日本を解放するための、云わばレジスタンスなのだ。

「そのために、兼ねてからの立案されていた作戦、24区、セフィラゲノミクス研究施設より生物兵器の奪取を決行する」

今度こそ、周囲のざわめきは一際大きいモノとなつた。

順を負つて説明すると、日本はロストクリスマス以降、政府が自国のみでの解決を諦め、ロストクリスマス時に投入された多国籍部隊に行政権を委譲した。

そして、件の多国籍部隊への行政権委譲を受け、国連が発足させたのが日本における暫定統治組織、つまりはGHQである。そし

て、そのGHQの本部があるのが、今回僕らが突入する24区である。

つまり、何が言いたいかと言えば……

「とは言うけど、涯。

少し無謀なんじゃないか？」

そう、先の説明から分かる通り、24区には現在の日本で一番権力を持つ者たちが集まっている。そんな地区の警備がどれだけ嚴重かは、想像に難くない。

僕の主張に対し涯は、平然とした口調で応える。如何な状況下においても冷静な彼は、今日も鉄の仮面を被っているようだ。

「事情が変わった。近い内に、GHQ司令官ヤン少将の息子、ダリル・ヤンが24区に派遣されるらしい」

「ダリル・ヤン……『皆殺しのダリル』か」

いつの間にか隣に来ていたアルゴが、苦い顔でそう洩らした。

ダリル・ヤン。17歳にしてGHQ少尉であり、人型ロボット『エンドレイヴ』新型のシュタイナーを駆る、要注目人物だ。

操縦技術云々よりも危険なのが、その思想なのだが……今は割愛しよう。

「ヤツが加われれば、作戦決行は今以上に困難となる。となれば、手早く済ませるべきだ」

涯の意見に、満場が一致した。流石カリスマリーダー。

「では、作戦パターンを説明する前に、大まかな基本作戦を伝える。今回、生物兵器を奪取するのはいのり、お前だ」

僕、の隣の少女に、視線が集まる。だが、好奇や同情の視線ではなかった。

彼女だって葬儀社の一員であり、その実力は極めて高い。反対する者は、いなかった。

「勿論、皆はいのりの支援に当たって貰う。そして 仁。お前には、今回囿になって貰う」

その、あまりに冷徹な一言に、再び周囲のざわめきが大きくなっ

た。

「涯！ いくら仁でも」

いのりは慌てて涯を止めようとするが、残念、僕の方が早かった。僕は、いのりの前に空いてる左手を上げた。

「やるよ、涯。リミッターレベル制限解除は？」

「level thirdまで引き上げる」

「ん、分かった」

やれやれ、人使いの荒いこつて。

thirdか……使うのは何カ月振りだろうか。

前使った時は、全身筋肉痛で1日動けなかったな。

しかも、最近はfirstしか使ってないから、身体が鈍って仕方がない。

そこで、僕は涯に提案する。

「涯。綾瀬の『ジユモウ』と模擬戦がしたいな」

どこからか、ゲ、と声が洩れた。綾瀬か。ゲ、とは酷いな、ゲ、とは。

「良いだろう。お前はどうか、綾瀬？」

「は、はい！ 大丈夫です」

涯の鋭い視線の先で、車椅子の少女が上擦った声で応えた。

茶髪のポニーテール少女、名前は篠宮しのみや綾瀬あやせ。

葬儀社のエンドレイヴ操縦者である。『ジユモウ』とは彼女のもう一つの（一つは車椅子）愛機である。

端から見れば、さぞかしそれは異常な申し出だったことだろう。

元来、エンドレイヴは対個人用に出来ている訳ではない。十や二十、それ以上の多人数、または兵器相手を想定して作られた代物だ。だが、今回囿になる以上、エンドレイヴの相手は必須だ。

破壊はせずとも、動きを封じるか、最悪引き付ける程度の働きはしなくてはならない。

つまり、エンドレイヴとの模擬戦は、一石二鳥で手間が省ける。

綾瀬の了解も戴けたことだし、今回はsecondくらいは使う

かな。

『綾ねえ、準備オーケー？』

エンドレイヴ『ジユモウ』の内部に、聞き慣れた女の声が反響する。

オペレーターであるツグミの最終確認に、私は思念で是と返した。エンドレイヴに搭乗している間、搭乗者の意識、感覚、果てはダメージも機体にリンクする。

死なないための救済措置もあるが、今回は模擬戦。アレの出番もないでしょうね。

はあ……それにしても、何故こんなことになっちゃったんだろう？ 涯さんの命令だから仕方無いけど、またアイツの相手をするなんて……前戦つた時は、この子の片腕がイカれたのよね。

はあ、『ジユモウ』に申し訳ないわ。

『ちよつと仁！ アンタ、またジユモウに傷つけないでよ！』

「んなこと言われても……」

確かに、普通の人間相手なら酷い話かもね。いや、どうせ傷なんかつけられやしないか、涯さんでもなし。

ともかく、普通のヤツならこんなこと言わないけど、仁は完全「アイツ」に例外。

「おーい綾瀬。そろそろ良いかー？」

気の抜けた声を掛けてくる仁を見て、こめかみに血管が浮かぶ。

何故だか、アイツを見てるとイラッとする。

あ、そっか。アイツが作戦会議とかで遅れて涯さんに迷惑掛けるからか……そう思うと、頭にヒシヒシと血が集まってくる感じがした。

『手加減抜きで行くわよ！ 覚悟しなさい、仁！』「うお、迫力すげえ」

自身の5、6倍はあろうか高さのエンドレイヴ相手に、仁は全く

動じる気配を見せない。

そして、彼の口から 彼の力の枷を外す言葉が紡がれた。

『apocalypse breaker (破壊者の黙示録)』

limit over (制限解除) …… phase second

(第2階層) 『

## 細胞兵器奪取作戦

「ふいー、やっぱ久々のsecondは辛いな」

首をコキリ、と回し、僕は大きく伸びをする。

そんな僕の背後から、エンドレイヴ『ジュモウ』の、搭乗席解放の圧縮空気が聞こえた。

中から、車椅子の綾瀬が出てきた。うん、ありゃあ相当ご立腹の様子

「辛いなー、じゃないわよバカ！ アンタの所為で一部破損しちゃったじゃない！」

と、物凄い剣幕とスピードで僕の下に（車椅子で）走ってくると腕を掴まれて、あれ、景色が反転

「ひでぶっ!？」

逆さまになった景色が、そのまま暗転ブラックアウトしました。

ああ、模擬戦だからいのりの手錠外して貰って正解だったわ。

やれやれ、あの仁バカめ……まあ、腕は鈍ってはいないようだ。それを、俺のすぐ目の前……武装を使い果たしたエンドレイヴ、『ジュモウ』が物語っていた。

熟練者が使用すれば、万人単位の虐殺すら可能なエンドレイヴの兵器、その全てに狙いを定められ、しかし仁は無事だった……まあ、流石に怪我はしているがな。

それも、ヤツの回復力なら一時間と経たず治ることだろう。

仁が囷役なもの、この体質故の判断だ。

どの道、作戦のためには囷の存在は必須であり、最重要要素。生存率の最も高い仁に任せることが、リーダーである俺に出来る最善の作だ。

「涯。作戦決行は何時なのですか？」

「明後日の1800だ。皆、それまで各自用意をしておけ。休憩も怠るなよ」

皆一様に頷き、その場を去っていった。

さて、この場に残ったのは涯おれと綾瀬、四分儀にいのり、そして…未だ目を回すこのバカ、大沢おおさわ 仁のみだ。

「おい、仁。そろそろ起きたらどうだ」

「あいあいさー！」

やはり寝た振りか…絶対フケろうとしたな、コイツ。

「今回ばかりは、お前にも作戦パターンを全て覚えて貰う。異論は認めん」

「ええ、だってあんなん覚えきれぬ訳げえ」

セリフの途中で襟を後ろに引っ張られると、こうなるのか。

「何言い訳してんのよ！ 皆やってることなの！ アンタもやりなさい！」

「ふむふむ、何々…作戦パターンA 1、エンドレイヴ3機が2、1の比率で奪取組、囷に分断された場合の対処…」

数秒後、仁の頭から煙が出てきた。そんなパズルみたいにした覚えは無いらだが。

「やつは無理だよ……」

「頑張つて、仁。私も手伝うから」

失意で床に手を着いた彼に救いの手を差し伸べたのは、俺の隣にいたいのりだった。

「マジ!? ふ、いのりに教えて貰うならこの程度、3日あれば覚えてやるぜ」

「作戦決行は2日後なんだが」

「すみません、1日で覚えます……」

皆そうしてるがな、と付け加えると、仁の動きが一瞬止まったが…まあ、問題は無いだろう。多分。

さて、俺は俺で、後々の作戦に備えるとするか……

「作戦パターン B 78、作戦パターン F 39、作戦パターン G 15」

「何やかんやで作戦当日作戦パターン A 4。」

日も落ちかけ、辺り一面が夜の闇と夕方の紅い光が混じりあう街中作戦パターン E 80。

近くの廃ビルに点々と潜むは、僕ら葬儀社だ作戦パターン C 2  
1。これより僕らは、闇に乗じて作戦を決行する作戦パターン I 42。

「作戦パターン A 92、作戦パターン D 77、作戦パターン作戦パターン作戦パターン作戦パタ」

「パタパタうるせえ！」

「どうしてこうなった……」

僕の隣でアルゴが額に青筋を浮かべ、涯が額に手をやっているパターン。

「一体どうしたんだろうパターン。」

「どうやら、作戦パターンの量が脳内の容量を越えていたようですね」  
ね

いつも通り冷静に、四分儀が分析してるパターン。

「パターンパターンパターンパターンパターンパターンパターン」

「うるさい」

いのりに銃のグリップで殴られました。

「のがいつ!?!」

はっ、僕は今まで何を……!?!

「ナイスだ、いのり」

「一緒に作戦パターンも全部飛んだようですがね」

作戦パターン……? なんだろう、その単語を聞くと頭がズキズキ痛む。

「この際だ、仁には自分で何とかして貰う。……突入まで、後57

秒

「何やら頭が痛い、まあいい。涯が、作戦決行のカウントダウンを開始した。」

「34秒」

皆に緊張が走る中、僕は独りでに、解放の言霊を紡ぐ。

『『apocalypse breaker (破壊者の黙示録)』  
limit over (制限解除)……phase first (第1階層)』

僕の身体の中を、超ミクロンサイズの結晶が侵食する。そして、それが僕の細胞の一つ一つを、活性化させていく。

僕の身体能力が、常人を遙かに越えたところまで到達したところで

「作戦開始！」

涯の号令に続き、葬儀社のメンバーが続々と動きを始めた。

かく言う僕も、傍らに置いてあったアサルトライフルを二挺、それぞれ片手に持った。

この状態……firstの<sup>スペック</sup>身体能力なら、アサルトライフルの一挺や二挺、その反動を打ち消すくらいは造作も無い。

僕は皆がいのりの支援を開始する中、唯一人そこから真逆の方向に向けて駆ける。

言っておくが、ハブられてる訳じゃないからな。

囧が本命と逆方向で戦うのは、当然だろう。

「おつ、敵さんはつけ〜ん」

24区の東側の橋、その200メートル程先に、敵兵七名を確認。装備は僕と似たようなアサルトライフルを各一挺……戦備の足しにするか。

僕は壁に背を当てながら敵の様子を窺う。囧だから派手にやっても良いが、まずは奴等から銃をパクろう。

敵兵が、意識を他所に移した直後、僕は猛進の勢いで壁から背を離した。

敵はこちらに気づいていない。まず、一步。

渾身の力で踏みつけたコンクリートに、僕の足形から放射状にひび割れが起こる。

そして、僕と言えば、まずは20メートルを一步で進んだ。続いて、再度地を蹴る。

先の踏み込みの爆音でこちらに気づいた敵兵三名に気づかれた時には、僕と敵の距離は70メートル程。

アサルトライフルの引き金を絞る。

銃閃が瞬き、敵の腕や腹を貫いていく。が、何人が仕留め損ねた。下手つくそだな、僕。

「貴様、何者だ！」

うーん、応える必要なんてないんだけど……ま、困だし、派手にいくかな。

「通りすがりのテロリスト、大沢 仁様16歳！ どうぞお見知り置きをつてなあ！」

アサルトライフルを空中に放り投げ、敵の注意を逸らす。

同時に、重いアサルトライフルが手元から消え、僕の身体はより軽くなる。

先より遥かに強く、それでいて不必要に地面を破壊しない踏み込み。

既に敵との距離は40メートルを切っていたが、その刹那で敵の間を通り過ぎた。

放り投げたアサルトライフルをキャッチし、二人の背中を撃ちまくる。

残った一人にも銃弾をお見舞いして、潜入成功だ。

敵からアサルトライフルをかき集め、取り敢えずマガジンだけ抜いて、二挺を載っていく。僕が元々持っていた二挺は……棄ててもいいかもだが、四分儀や大雲に何言われるか分からないし、止めておこう。

僕は肩に掛けるホルスターみたいなモノの背中にライフル二挺を

挿し、残りを両手で持った。

何はともあれ、取り敢えず……

「こっからがショータイムだ。派手に楽しもうぜ？」

僕の眼前に現れた、三機のエンドレイヴに向けて、そう言い放つ  
のだった。

## 細胞兵器奪取作戦（後書き）

集が出るのは何時になるのやら。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1647z/>

---

罪の王冠と破滅の黙示録

2011年12月8日01時02分発行